

古代建築の柱間装置の仕様

— 第一次大極殿院の復原研究21 —

はじめに 『紀要 2014』では、南門の柱間装置(五間三戸、妻面は壁、上層中央間は扉、脇間・端間は連子窓)、および廻廊に開く門(扉)の位置の復原案を示した。この成果を受け、本稿では、主に現存する古代建築について扉と連子窓の仕様を整理し(表2・3)、第一次大極殿院の建物に用いる扉と連子窓の仕様を検討する。

既に復原整備した朱雀門と第一次大極殿(以下、大極殿とする)では、扉が大型のため唐招提寺金堂の扉を参考に板棧戸としたが¹⁾、大極殿院の建物は規模が様々であり、扉の大きさと形式の検討が必要となる。

連子窓については、朱雀門では窓枠の断面を凸形とし、各窓の中央に中柱を立て、小脇壁を設けたが、その検討過程は示していない。大極殿では法隆寺金堂を参照して、窓枠の断面を四角とし、各窓の中央に中柱を立て、納まりをよくするために小脇壁を設けている。

扉の大きさと形式 古代建築にみられる扉の形式には、大きく分けて板唐戸と板棧戸の2種類がある。板唐戸には一枚板と、数枚の板の上下を端喰で継ぐものがある。板棧戸には厚板を横棧で継いで厚板自体に軸を造り出すものと、薄板を横棧で継いで堅框を軸にするものがあり、後者の古い事例に平等院鳳凰堂中堂の桁行中央間の扉(両面に薄板を張る)がある。

古代建築の扉1枚の幅と高さの関係(図4)は、扉の形式に関係なく幅：高さ＝1：2～3に集中する。廻廊のように柱間寸法に対して柱高が低い事例では、小脇壁や間柱を入れて扉幅を調整するため、扉1枚の縦横比はこの範囲に納まっている。形式別には、板唐戸は一枚板では幅5尺・高さ10尺、数枚矧ぎでも幅6尺・高さ12尺を超えない。これは扉の大きさによって横棧の本数を増減できる板棧戸に対し、板唐戸は横材が端喰のみであり、扉の大きさに限度があるためと考えられる。

なお現存する廻廊のうち、中軸線上とそれ以外にも門が開く事例²⁾では、棧唐戸を用いる事例と鶴岡八幡宮(楼門1930年再建)を除くと、中軸線上とそれ以外に開く門の扉形式は同じである。

扉構え 下部軸受は、古代建築では闕、唐居敷、長押、地覆、藁座がある。門3例をみると、法隆寺中門は現状

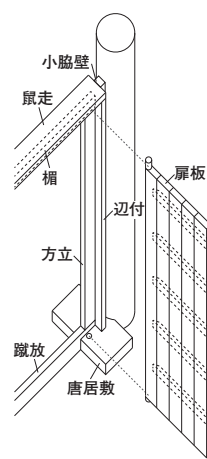
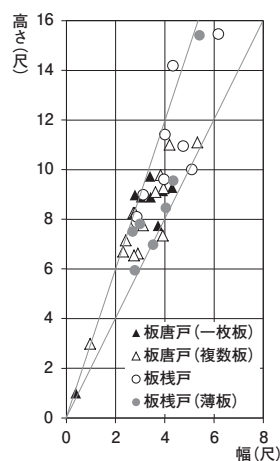


図4 古代建築の扉の大きさと形式 図5 扉構え模式図(朱雀門参考)

が地長押、復原図が闕である。法隆寺東大門と東大寺転害門(現在は扉なし)は木製唐居敷である。平城宮内では石製唐居敷の可能性がある石材が7点出土しているが、これらは掘立柱建物所用と考えられる³⁾。また絵画資料で軸受がわかる描写はほぼ唐居敷に限られ、その他は曖昧な描写が多い。

上部軸受は、古代建築では長押、鼠走、台輪、桁、藁座がある。下部軸受に唐居敷を用いる新薬師寺本堂、法隆寺東大門、東大寺転害門では、いずれも上部軸受は長押である。絵画資料の多くは建物を俯瞰した構図で描かれているため、上部軸受は描かれない。

このほか、蹴放、方立、鼠走は基本的に全事例にある。辺付は法隆寺の諸建物および法起寺三重塔にみられる。その多くは下部を闕、上部を鼠走と組みあわせて扉枠を形成している⁴⁾。上下の軸受を長押とする事例では、小脇壁の見切りとして辺付を用いていると考えられる。

連子窓 窓枠の断面形状は、当初方形⁵⁾であったが、奈良時代に窓枠と辺付を一本で造り出した凸形が現れるようになり、平安時代には唐戸面をもつものが登場する。

ここで、朱雀門や大極殿の復原で採用した中柱に注目したい。中柱を入れる6例⁶⁾から、中柱の機能は次の3つが考えられる。

- 戸当たり：法隆寺金堂、同五重塔、同中門では連子窓の一部を扉としており、中柱をその戸当たりとする。裳階は主屋にあわせて中柱を入れたと考えられる。
 - 間柱：法隆寺東院夢殿の中柱は間柱であり、中備の平三斗を受けている。
 - 中間の縦枠：a、bでは中柱を境に2つの窓枠が並ぶが、法隆寺東院伝法堂、榮山寺八角堂では、窓枠内に中柱を立てて中間の縦枠とする。前者は窓枠の幅が広いことから、窓枠の補強もしくは連子窓が連続する意匠に変化をつける目的が考えられる。後者はbの法隆寺東院夢殿の窓の意匠に倣った可能性がある。
- 古代建築では中柱と小脇壁を併用する事例はない。絵

表2 古代建築の扉

建物名	建立年代	用途	扉			扉構え			備考
			扉の時代	開き	形式	端喰/棧	板枚数	上部軸受	
1 山田寺回廊	飛鳥-奈良	他	—	内	不明	不明	不明	薬座	× (+小脇壁)
2 法起寺三重塔	飛鳥	塔	明治	外	板唐	埋端喰カ	4	鼠走*	○*
3 法隆寺廻廊	飛鳥	他	不明	内	板唐	端喰	3-4	長押	○ (+小脇壁)
4 法隆寺金堂	飛鳥	堂	当初	外	板唐	埋端喰	1	鼠走	○
5 法隆寺金堂裳階	飛鳥	他	当初	内	板唐	端喰	1	桁	×
6 法隆寺五重塔	飛鳥	塔	当初	外	板唐	埋端喰	1	台輪	○
7 法隆寺五重塔裳階	飛鳥	他	当初	内	板唐	端喰	2	桁	×
8 法隆寺中門 (現状)	飛鳥	門	慶長カ	内	板唐	埋端喰カ	3	長押	× (堅磐軸状)
9 法隆寺経蔵	奈良	堂	不明	内	板棧 (薄板)	棧	4	(現状薬座)	△ (間柱状)
10 法隆寺食堂	奈良	堂	鎌倉前後	外	板唐	端喰カ	2	長押	×
11 法隆寺東院伝法堂	奈良	堂	当初	外	板唐	無	1	鼠走カ	○ (+小脇壁)
12 法隆寺東院夢殿	奈良	堂	延文、慶長	外	板唐	端喰	6	長押	○ (+小脇壁)
13 法隆寺東室 (復原)	奈良	他	(復原)	外	板唐	不明	2	鼠走	○
14 法隆寺東大門	奈良	門	近世後補	外	板棧	棧	3	長押	×
15 海竜王寺西金堂	奈良	堂	復原*	外	板棧 (太鼓)	—	—	薬座	× (+小脇壁)
16 手向山神社宝庫	奈良	倉	当初	内	板唐	端喰	1	鼠走	△方立柱
17 新薬師寺本堂	奈良	堂	当初	内	板棧	棧	5-6	長押	×
18 正倉院正倉 (中倉)	奈良	倉	不明	内	板棧	棧	2-3	鼠走	△方立柱
19 唐招提寺金堂	奈良	堂	当初	内	板棧	棧	8	長押	×
20 唐招提寺経蔵	奈良	堂	中世カ	内	板棧 (薄板)	棧	3カ	鼠走	△方立柱
21 創建唐招提寺講堂 (復原)	奈良	堂	(復原)	内	板棧	棧	不明	鼠走	○
22 唐招提寺宝蔵	奈良	倉	復旧	内	板唐	×	1カ	鼠走	△方立柱
23 東大寺転害門	奈良	門	—	内	不明	—	—	長押	×
24 東大寺法華堂 (正堂)	奈良	堂	当初	外	板唐	端喰	7	長押	×
25 東大寺本坊経庫	奈良	倉	当初	内	板唐	×	1	鼠走	△方立柱
26 薬師寺東塔 (裳階)	奈良	塔	不明	外	板棧 (薄板)	棧	3	長押	×
27 榮山寺八角堂	奈良	堂	当初	外	板唐	埋端喰	2	長押	×
28 元興寺極楽坊五重小塔	奈良後	塔	当初*	外	板唐	無	1	長押	×
29 法隆寺綱封蔵	平安前	倉	奈良	内	板棧	棧	4	鼠走	○*
30 東大寺勧進所経庫	平安前	倉	当初カ	内	板棧	棧	2	長押	△方立柱
31 東大寺法華堂経庫	平安前	倉	中世	内	板棧	棧	3	鼠走	△方立柱
32 室生寺金堂 (正堂)	平安前	堂	不明	内	板唐	端喰	不明	鼠走状	×
33 室生寺五重塔	平安前	塔	江戸*	外	板唐	端喰	2	長押	×
34 法隆寺大講堂 (復原)	平安中	堂	(復原)	内	板棧	棧	3	長押	×
35 法隆寺鐘樓	平安中	堂	近世	内	板棧 (薄板)	棧	3	長押	△ (間柱状)
36 平等院鳳凰堂中堂	平安中	堂	当初	外	板棧 (太鼓)	棧	6	長押	×
37 醍醐寺五重塔	平安中	塔	当初	外	板唐	端喰	2	長押	×
38 法隆寺妻室	平安後	他	(復原)	外	板唐	埋端喰カ	不明	鼠走カ	×
39 當麻寺本堂 (曼荼羅堂)	平安後	堂	中世以後	外	板唐	端喰	2	長押	△ (間柱状)

○：有 ×：無 △：刃付に代わる部材

形態が同じものは部材名称を統一した。

表3 古代建築の連子窓

建物名	建立年代	窓の時代	窓枠の断面形状	刃付	小脇壁	中柱
1 法起寺三重塔	飛鳥	復旧	□ (上は貫)	弊		
2 法隆寺金堂	飛鳥	後補 (古制残)	□	○	○	○
3 法隆寺五重塔	飛鳥	当初残	□	○	○	○
4 法隆寺中門 (現状)	飛鳥	慶長カ	□	○	○	○
5 法隆寺経蔵	奈良	当初、中世	□	○	○	
6 法隆寺鐘樓	平安中	後補	□ (下は貫)		○	
7 平等院鳳凰堂内閣楼	平安中	不明	唐戸面		○	
1 山田寺回廊	飛鳥-奈良	当初	□	○	○	
2 法隆寺廻廊	飛鳥	不明	□	○	○	
3 法隆寺金堂裳階	飛鳥	当初 (一部後補)	□			○
4 法隆寺五重塔	飛鳥	当初残	□	弊		
5 法隆寺五重塔裳階	飛鳥	中世取替カ	□			○
6 法隆寺食堂	奈良	後補	□上下 (貫)			
7 法隆寺東院伝法堂	奈良	復原	凸			枠
8 法隆寺東院夢殿	奈良	復原	凸	○	○	
9 法隆寺東室 (復原)	奈良	復原	凸上下、□左右	○	○	
10 海竜王寺西金堂	奈良	中古材	□上下			
11 唐招提寺金堂	奈良	当初	凸			○
12 創建唐招提寺講堂 (復原)	奈良	復原	凸			枠
13 東大寺法華堂 (正堂)	奈良	近世	唐戸面			○
14 榮山寺八角堂	奈良	不明	□上下、凸左右			枠
15 元興寺極楽坊五重小塔	奈良後	復原	□			
16 平等院鳳凰堂中堂	平安中	早期の改変	唐戸面			○
17 醍醐寺五重塔	平安中	不明	唐戸面			○

縦線より上は上層、下は下層

○：有 弊：堅磐軸状 枠：中間の縦枠

注

- 1) 奈文研『平城宮朱雀門の復原的研究』1994。奈文研『平城宮第一次大極殿の復原に関する研究2 木部』2010では、当初の扉が*残る古代建築の事例から、奈良時代初頭までは一枚板が多く、次第に数枚刃ぎが主流となり、その場合裏棧有りが過半数を占めると指摘した。
- 2) 法隆寺廻廊、春日大社本社廻廊、北野天満宮廻廊、石清水八幡宮廻廊、東照宮東西廻廊、東大寺廻廊、神部神社浅間神社回廊、鶴岡八幡宮上宮回廊、京都御所回廊の計9例。
- 3) 7点のうち最大の事例は、『1991 平城概報』で礎石建ちと報告するが、現物を確認して、礎石との取り合いの加工がなく礎石建物に用いることは困難と判断した。
- 4) 平山育男「扉口装置の変遷と弊軸の成立 (上)」『日本建築学会計画系論文集』529、2000を参考とした。
- 5) 法起寺三重塔、法隆寺鐘樓・食堂は貫が窓枠を兼ねる。
- 6) 創建唐招提寺講堂は法隆寺伝法堂を参考に復原していることから、事例から除いた。

画資料では、重層門の上層連子窓には小脇壁がほぼ描かれており、その場合基本的に中柱は描かれない。『弘法大師行状絵詞』(1389年)に描かれた東寺南大門には中柱が唯一みられ、小脇壁も描かれる。ただし、同絵巻の他の場面で描かれた同じ建物に中柱は描かれていない。

第一次大極殿院の柱間装置の仕様 以上の類例の検討から、大極殿院の建物に用いる柱間装置の仕様を示す。

扉1枚の縦横比のほか、古代建築の柱間寸法と扉口の幅の比率等を考慮すると、南門・北門・東西面回廊に開く1間門は扉1枚の幅が5.5尺以上必要で、一枚板の板唐戸とはし難い。さらに扉の縦横比より扉高が12尺を超えるため、扉形式は板棧戸とし、他の扉もこれに倣う。

扉構えは、門という機能上、下部軸受は蹴放を取り外すことができる唐居敷とし、それによって上部軸受は長押と考える。唐居敷の素材は石製である可能性は否定できないが、平城宮内出土の石製唐居敷は礎石建物の所用とは考え難く、木製が穏当と考える。刃付は小脇壁を設ける場合を除き用いない。

連子窓の窓枠の断面形状は時代性を考慮して凸型とする。また上層連子窓で中柱を入れる事例は、すべて戸当たりとして用いているが、これは法隆寺に限定される特殊な形式である。よって中柱は入れず、小脇壁を入れて窓枠の幅を調整することとする。

(村山聡子/名古屋工業大学大学院博士後期課程)